発達障害を持つ子どものことばを育む
—外来でのご家族へのアドバイスを含めて—

中 川 信 子

「小児の精神と神経」 第57巻第3号 別刷
(2017年10月)

アークメディア

教育講演

発達障害を持つ子どものことばを育む
—外来でのご家族へのアドバイスを含めて—

中川信子*

I．ことばについて

1．ことばとコミュニケーション

「人は分かり合うために話すのです」ということばがある．言語聴覚士はことばに何らかの問題を持つ人がその周囲の人たちと「分かり合う」ことを手助けしようとする職種である．

発達障害のある子どもは，ことばの遅れやコミュニケーションの取りづらさなど，保護者を悩ませる問題を持つことが多い．

ここでは，筆者が保護者の方たちに，ことばの発達をどう捉え，毎日の暮らしの中でどのような関わりをすればよいのか，日ごろお伝えしている内容を中心にお話しする．日ごろお会いになる保護者に，言語発達の促し方を伝える際のヒントにしていただければ幸いである．

なお，筆者は主として就学前の幼児期のお子さんを対象に仕事をしているため，低年齢のお子さんに焦点を当ててお話しすることになるが，ことばやコミュニケーションの原則は，子どもでも大人でも共通している．

Nature has given us two ears but one mouth
To hear more than to speak.

「天は私たちに口を一つ，耳を二つ与えた
話すより多く　聞くために」

人と人とのコミュニケーションにおいて，最も大切なのは相手のことばや気持ちを「よく聞くこと」である．

2．「ことば」三つの意味

「ことば」といわれてまず思い浮かべるのは言えることば(音声言語)だが，「ことば」は以下の3つの視点で捉えることができる．

①話しことば，音声言語(speech)
②言語知識，内言語(language)
③コミュニケーション

話しことばとは，「リンゴ」(r-i-n-g-o)のように音声として発せられることば，言語知識とは，「リンゴとは，赤くて丸くて甘酸っぱい果物だ」と知っていることであり，体験や学習によって知識として脳内に整理・蓄積される．コミュニケーションとは各自の思いを，音声または音声以外の手段(ジェスチャーや視線など)を用いて他者に伝えることである．

3．会話のプロセス

「リンゴ食べる？」と聞かれて「食べる」と答える場面を想定し，話し手と聞き手の中で何が起

Nobuko NAKAGAWA: To Facilitate Speech Development of Children with Developmental Disorder — Some Advices for Parents to Cooperate with Us —

*子どもの発達支援を考えるSTの会［〒292-0825 千葉県木更津市畑沢2-36-3］

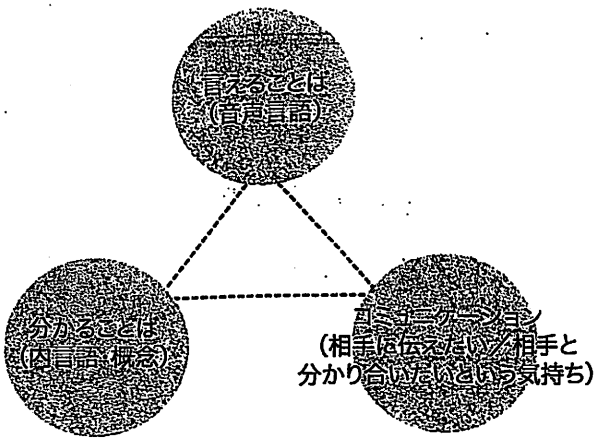


図1　ことばに含まれる3つの意味

き，そのためにどのような能力が必要なのかを考えてみよう．

①聞き手は話し手が発した音声を聞き取る．聴力障害があると聞けない．

②音声を語音として聞き取り，脳内に構築されている音韻リストを検索・照合する．検索している間じゅう，注意を向け続けている力が必要である．

③音韻の並び方を把握し，脳内に構築されている「言語辞書」とでもいうべきものを検索し，照合する．ここでことばの意味(リンゴ＝丸くて赤い果物．食べる＝口に入れて噛み，飲み込む)が分かる．

④語の並びを把握し，話しかけられた内容を理解する．

⑤話しかけられた内容に対する返事を考える(うん，いる，食べる，いらない，後でなど)．

⑥返事の内容に合うことばを脳の中のリストから選び出す(「食べる」)．

⑦そのことばを表す音韻を脳内の音韻リストから選び出す(「タベル」)．

⑧選んだ音を脳の中で順番に並べる(t-a-b-e-r-u)．

⑨1つずつの子音，母音の構音プログラムを呼び出し，舌や唇を正しい順番に動かす(t-a-b-e-r-u⇒タベル⇒食べる)．

tとbが入れ替わるとb-a-t-e-r-uバテルという全く違ったことばになる．幼児期にはメガネ(m-e-g-a-n-e)をゲマネ(g-e-m-a-n-e)というなど，言い間違いが頻発するが，これは，脳の発語に関わる機能が未熟であることを示している．脳機能の成熟に伴って次第に消失する可愛らしいミスである．

⑩自分が発したことばに間違いがなかったかどうかチェックする．耳が聞こえていることが必要．

発話速度であるが，私たちは1分間に300文字，つまり1秒間に5文字程度の原稿を読める．原稿は漢字混じりなので，ひらがなに換算すると1秒間に6～7文字になる．「リンゴ食べる？」，「食べる」という簡単な会話なら1秒半か2秒の間に完了する．

さらに，ひらがなはア行やンなどの例外を除き，子音と母音で一文字が構成されている．「リンゴ食べる？」はr-i-n-g-o t-a-b-e-r-uと11個の音で成り立っている．2秒弱の間に，舌や唇を10回以上，目にもとまらぬ速さで操作しているのである．高次脳の働きである「ことば」が，実に精妙かつ高度な能力を必要としていることがお分かりいただけるだろう．

以上の①から⑩までの操作の間じゅう，ワーキングメモリーが正常に作動すること，ごく短時間ではあるが，注意が他にそれないようにコントロールする能力が必須である．発達障害のある子どもは注意機能に問題を持つことが多く，ことばやコミュニケーション発達に影響する要因となっている可能性がある．言語聴覚士を含め，子どもに関わる大人たちには「ことば」(音声言語)だけにとらわれず，生活の中で全体的な発達を促す方策が求められている．

4. ことばの発達の特徴

主として話しことば(音声言語)の発達にはいくつかの特徴があげられる．

1)言語発達は身体機能の発達，心の発達，認

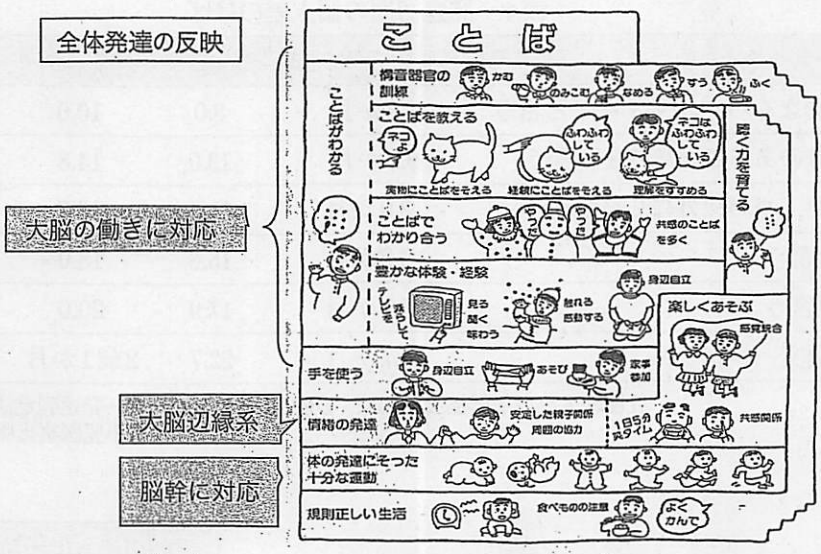


図2　ことばのビル

中川信子(1986)：ことばをはぐくむ．ぶどう社，95ページより改変引用

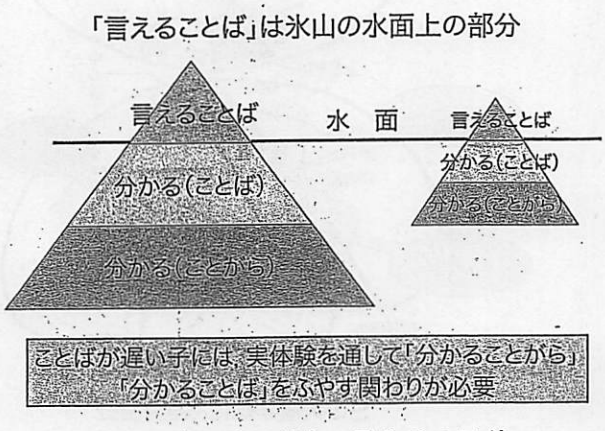


図3　分かるのが先　言えるのは後

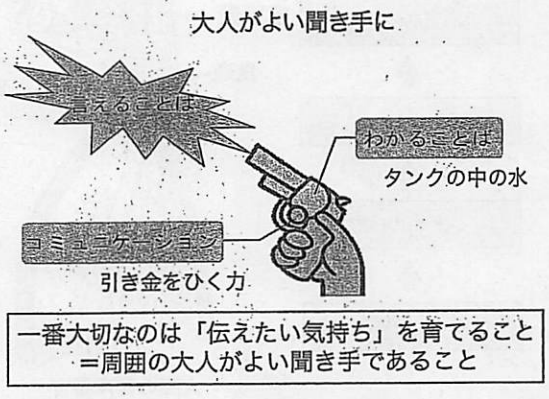


図4　コミュニケーション意欲を育てる環境

知発達など子どもの全体的な発達の反映であり，毎日の暮らしの中での積み重ねが重要である．積み重ねの具体的な内容を「ことばのビル」として表現した(図2)．

2)「言語理解は言語表出に先行する(分かるのが先，言えるのは後)」．乳幼児の言語学習においても，外国語の習得過程においても共通している．保護者には「ことばの氷山」の絵を使って説明している(図3)．

毎日の生活の中で実体験を通して学ぶことが大切である．例えば，おやつの牛乳を飲む時．周りの大人は「はい，牛乳よ」，「コップ，そっと持って」，「こぼさないようにね」などと話しかけるだろう．このような何気ない生活シーンでのことばかけを通じて，ことばが脳内の語彙リスト，言語辞書に書き込まれ，ことばが育つ．

3)言語発達は本人の生まれつきの要因と周囲の環境との相互作用の中で促進される．

発達障害などの要素により言語の学習がじょうずにできない子どもであっても，適切な養育環境，言語環境におけば，よりよく伸びることが可能である．特に大切なのは，コミュニケーション意欲を育てることである．これを水鉄砲で表わしてみた(図4)．

表1　発達初期の個人差のはば

項目	25%の子が達成	50%	75%	90%
意味なくパパ，ママなどと言う	6.0か月	8.0	10.0	12.0
意味のあることばを1語言う	9.2か月	12.0	14.8	17.6
ママ，パパ以外に2語言う	12.0か月	14.3	16.7	19.0
3語言う	13.2か月	15.6	18.0	20.4
6語言う	15.7か月	17.9	20.0	22.2
二語文	19.7か月	22.7	2歳1か月	2歳5か月

社団法人小児保健協会(2003)：DENVER Ⅱ―デンバー発達判定法―『言語』．小児医事出版社より引用

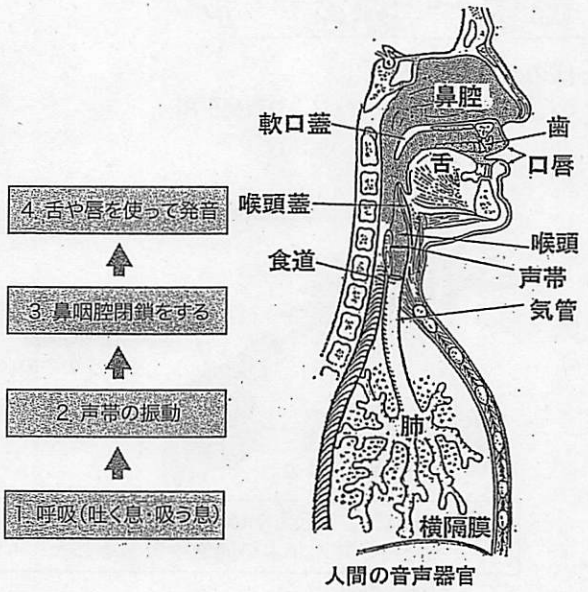
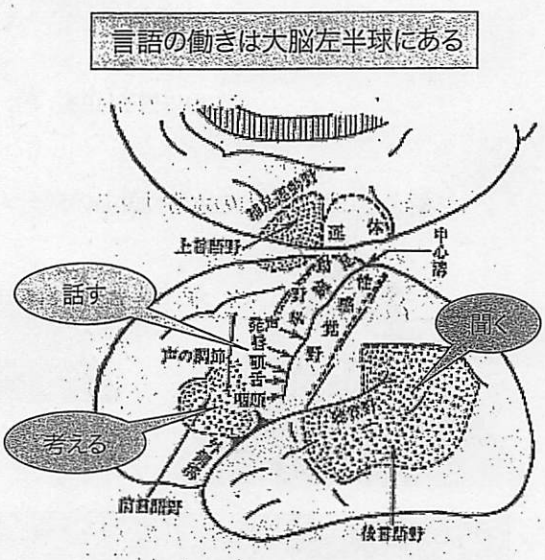


図5　話しことばの仕組み

ピーター・B.デニシュ，エリオット・N.ピンソン著，神山五郎，戸塚元吉共訳(1966)：話しことばの科学 その物理学と生物学．東京大学出版会，42ページより改変引用



左の大脳半球にある言語野

図6　大脳の役割分担

時実利彦(1962)：脳の話．岩波書店，115ページより許諾を得て改変引用

ことばをたくさん知っていても(水鉄砲のタンクに水がたくさん入っている)，引き金を引かなければ口から水(ことば)は出ない．引き金を引くエネルギーが「この人にこのことを伝えたい」という気持ちであり，コミュニケーション意欲である．コミュニケーション意欲を育てるために，周りの大人が「よい聞き手」となることが不可欠である．

4)発達初期には個人差が大きい

幼児期の言語発達は，個人差のはばが非常に大きい．「個人差が大きいものですよ」とだけお伝えしても，保護者の安心にはつながらないので，DENVER Ⅱから言語に関わる項目を一部抜粋した表を作ってお示ししている(表1)．

5. 話しことばの仕組みと脳の働き

話しことばの仕組みを示す(図5)．

私たちは呼気(吐く息)を使ってことばを発する．肺に入った空気が口から出る途中にある声帯を震わせた振動音がことばのもと(喉頭原音)である．その際，息が鼻に抜けないよう，軟口蓋を挙上して鼻咽腔閉鎖を行う．そして舌と唇

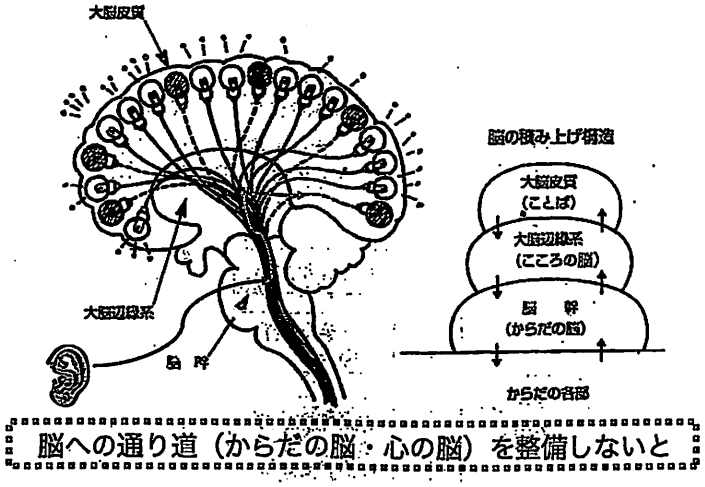


図7　三段重ねの脳

中川信子(1999)：1，2，3歳ことばの遅い子　ことばを育てる暮らしの中のヒント．ぶどう社，34ページより改変引用

をさまざまな形に変化させて構音(発音)を行う．

これら一連の動作はすべて，脳の関与のもとに動いている．脳の中でことばを受け持つ場所は，大脳の左半球である(図6)．

大脳左半球の「聞く」，「(ことばを)考える」，「話す(発声・発語)」場所が働けば，スムーズにことばが使用できるようになる．しかし，大脳に直接働きかけて言語獲得を一挙に進める方法は今のところないので，地道に進めることになる．

脳は三段重ねの構造になっている(図7)．

一番上に乗っているのが大脳．豆電球で表現したニューロンとそれにつながる「電線」で構成される．大脳のすぐ下，二段目の脳が情動の働きにかかわる大脳辺縁系．一番下が体の働きをつかさどる脳幹である．大脳辺縁系と脳幹はいわば電線の束である．

大脳にある豆電球(ニューロン)は，生まれたときに数が全部そろっているものの，出生直後から点灯するものと，出生時には配線工事が未完成でまだ点灯しないものとがある．生まれた後に配線工事を進めることが必要である．「刺激は脳の栄養」ということばのとおり，配線工事に必要なものは「刺激」である．

ことばの発達において，刺激とは「ことばかけ」と多くの人は考える．そのとおりなのだが，耳で聞きとったことばが，聴覚器で電気信号に変換され，聴神経を伝わって大脳の聴覚野に到達するまでには，脳幹と大脳辺縁系とを必ず経由する．いいかえれば，脳幹と大脳辺縁系の「電線」の通りがよくないとせっかくのことばも大脳には届かない．ことばかけに励むのは大切だが，ことばの通り道である脳幹と大脳辺縁系が，どんな状態にあれば学習が進むのかを考える必要がある．

体が元気で，心が安定し，楽しいことがたくさんあると刺激は大脳まで通りやすくなる．大脳辺縁系は記憶の仕組みと関係が深い．興味あることがらを，楽しい雰囲気の中で体験できれば，記憶，学習が進みやすい．前出の「ことばのビル」は，三段重ねの脳の働きと，毎日の生活の中で必要なかかわりをあらわしたものである．

6．1，2歳代のことばの遅れ

1歳6か月健康診査で，ことばが遅いお子さんは少なくないが，「ことばの遅れ」は状態像にすぎず，正確な定義は共通認識されていないのが現状だろう．

筆者は，乳幼児健診に関わる保健師と協働する中で，「ことばの遅れ」の説明を図8のように

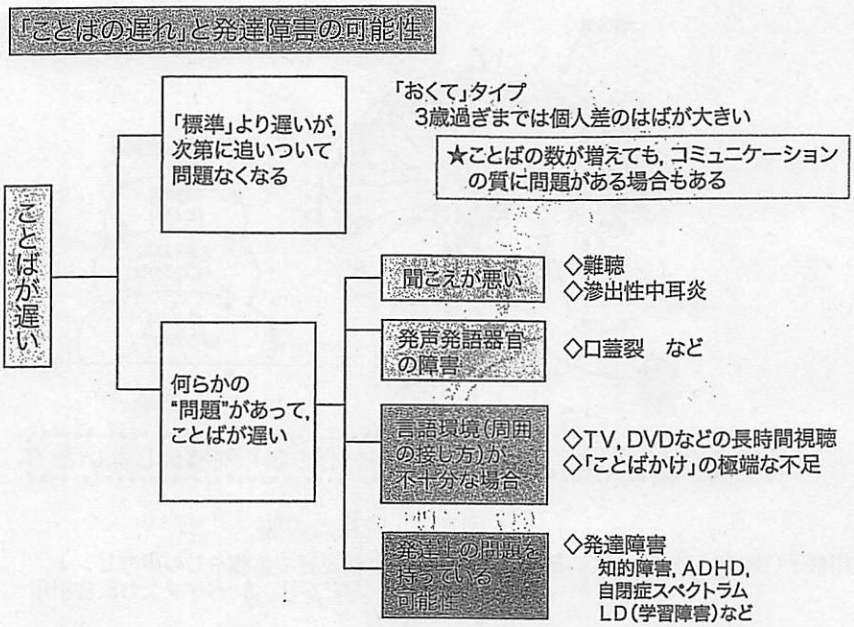


図8　ことばの遅れについて

まとめて考えている．

ことばの遅い子を大きく2つのグループに分けて考える．

一つは，「おくてタイプ」とでもいえる子どもたちである．ことばの表出は遅れるものの，理解・対人関係は良好，行動面にも気がかりな点がない．2歳過ぎから，遅い子では3歳近くなってから有意味語が出始め，その後順調に2語文，3語文になり，問題が残らないという子どもたちである．健診や事後フォローの場ではさほど珍しいことではない．ただし，本当に「なんでも分かっていて，話すことだけが遅い」だけなのか，何らかの問題が背景にあるのか注意深い観察は必要であるし，可能であればフォローするに越したことはない．

観察のポイントとしては，聴力，言語理解・状況理解，対人関係とコミュニケーション，顕著なこだわりの有無，落ち着きのなさ・目立った注意の途切れ，養育者のかかわり方があげられる．

もう一つのグループは，何らかの問題があってことばが遅れる場合である．問題の内容として，以下の四つを考える．

①聞こえの問題

②発声発語器官の問題

③環境要因

④発達障害がベースにあるもの

である．

①聞こえはことばの入り口であるから，聴力障害があれば，必然的にことばの遅れが生ずる．呼名や生活音への反応，話しかけへの応答の様子を聞き取りまたは観察する．

②口蓋裂など，発声発語器官に問題があり，発語しにくいためにことばが遅れる場合もある．頻度は少ない．

③テレビやDVDの長時間視聴，あるいは保護者がパソコンなどに没頭するなどして，遊びやことばかけの経験が極端に不足している場合である．一見したところ，自閉スペクトラム症のお子さんたちと同様に目が合わなかったり，応答性が低かったり，遊びがパターン的であったりするが，しばらく遊ぶと状態像が大きく変わり，短時間でコミュニケーションが改善するのが特徴的である．「ことばの遅れ」は，発達障害に由来するとは限らない．環境因がかかわっているかもしれないこのようなお子さんに対して，すべての保護者を対象とする「かかわり方

の底上げ」が必要であると痛感する．

④は，発達障害などの何らかの障害がベースにあり，そのあらわれとしてことばの遅れがみられる場合である．子どもの側に「ことばやコミュニケーションの発達が遅れる，あるいは弱い」という要因があり，そのうえ③のように不適切な言語環境での養育が行われると，障害の固定化，重度化につながる．

発達障害の可能性があっても，言語環境を含めた養育環境を改善し，子どもの健やかな発達を後押しするような介入は必要であり，かつ効果的である．

Ⅱ．ことばを育てるかかわり

1．からだ遊びが大切

1)ことばの前に遊びを通してコミュニケーション

「ことばが遅い」という主訴の幼児と言語聴覚士とのかかわりは多様である．4歳5歳児以上で，一定時間注意の持続が可能で着席できるお子さんでは，カードなどを使い限定された机上課題を通して言語能力の促進をはかるよう計画することができる．

しかし，1歳2歳では着席課題は難しいことが多い．3歳4歳以上であっても，発達障害の可能性があり，注意持続が保てないお子さんに対しては，まず，からだを使った楽しい遊びに徹底的に付き合うことから始める．遊びを通して，コミュニケーションスキルを育て，話し手に注目し，ことばかけや指示を聞き取る力を育てるためである．

保護者から「ことばが遅いから来たのに，なぜ体を使う遊びをするんですか？」といぶかしげに質問されることもあるが，ことばの発達にかかわる脳の働きを説明し「大脳のことばの場所にちゃんと刺激が届くためには，聞こえたことばの通り道である脳幹と大脳辺縁系の場所の電線が電気を通しやすくなっている必要があるからです．体を動かす遊びが電線の通りをよくするためには一番効果的なのですよ」と伝えて納得していただく．

2)感覚統合の考え方による説明

感覚統合の考え方に基づく説明はさらに説得力が増す．感覚統合の考え方では「固有覚(固有受容覚)」や「前庭覚(平衡感覚)」に注目する．固有覚とは，体のさまざまな部分の位置や動き，関節の曲がり具合，筋肉への力の入れ方などを感知しフィードバックする機能であり，力を加減する，運動をコントロールする，姿勢を保つ，バランスをとる，情緒を安定させる，ボディイメージなどと関係する．前庭覚は自分の身体の位置や傾き，動きのスピード，回転を感じる感覚であり，覚醒レベルの調節，抗重力姿勢の維持，バランスを取る働き，眼球運動などと関係する．五感の一つである触覚も重要な感覚で，情緒の安定，物を触感により識別する，触れられることへの防衛などの働きを生み出す．

これらの感覚が何らかの理由で十分に機能しないと姿勢保持の困難，覚醒レベルの低下，情緒の不安定，不器用，臆病，触覚防衛，自回転(くるくる回る)など，さまざまな不可解な行動を生み出す．発達障害のお子さんによくみられる症状である．体を動かす遊びを意識的に行うと，これらの感覚入力が調整され，適応的な行動が増えていくことが多い．

感覚統合を進める遊びの要素を大まかにあげた(図9)．

追いかけっこ，お馬さんごっこ，いないいないばあ，手遊び歌，ぎゅっと抱きしめる，など，昔から子どもを喜ばせるために大人が行ってきた遊びの数々を感覚統合という視点から捉え直すと，あらためてその大切さがよく分かる．発達に心配のある子どもにこそ，意識的な体を使った遊びにたくさん付き合ってあげたいものである．

文末に感覚統合の関連情報と参考になる本を

感覚統合をすすめる
(脳の中の電線の電気の通りをよくする)
遊びの要素

①揺　れ	ブランコ　抱っこしてゆする
②回　転	抱っこで回転　芋ムシごろごろ
③加速度	フロアカー遊び　すべり台
④上下動	トランポリン　高い高い
⑤触　覚	抱きしめる　水遊び　粘土

図9　感覚統合を進める遊びの要素

あげた．特に，JSI（日本感覚統合インベントリー）は，発達障害かもしれない子どもたちの，「気になる行動」を整理して捉える際の助けになるチェックリストである．

3）1日5回笑いのある遊びを

感覚統合の理論を持ち出すまでもなく，「1日5回お子さんと一緒に笑い合える遊びをしてみてください」と伝えるだけでも，親子の行動の変容につながる．かかわりにくい子どもとどうやって遊べばいいのか悩む親も多い．体を動かす遊びの中で，子どもが笑顔になってくれると，親としての有能感を持つことができ，もっと子どもとかかわろうと考えることができるからである．

2．ことばが育つ話しかけ方

1)共同注意

二者が一つのものに同時に注目する共同注意(joint attention)の成立は，言語コミュニケーション発達にとって不可欠である(図10)．

一つの「モノ」に二者が同時に注目し，その「モノ」を共有するのが視覚的共同注意である．例えば，子どもが犬を指さし，保護者も同じものを見ているときには視覚的共同注意が成立している．

一方，一つの音声のつらなり(ことば)に二者が同時に注意を向け，そのことばを共有するところに「ことば」が成立する．冒頭にあげた「リンゴ　食べる？」，「食べる」という会話は聴覚的な共同注意に基づいている．まだ話せない子

共同注意(joint attention)
複数の人が一つのもの(同じもの)に注意を向けること

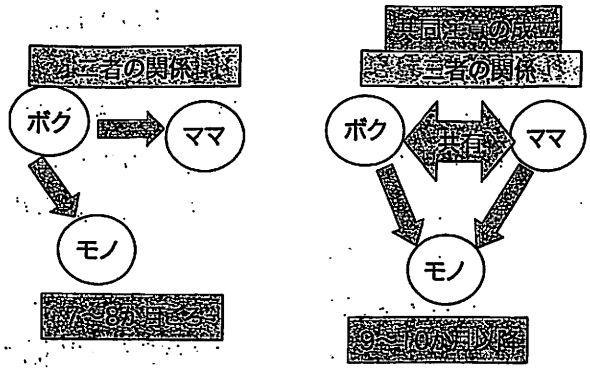


図10　共同注意

どもは見つけた「モノ」を指さし，「あ！」と声を出して保護者をふりかえる行動がみられる．これは，まだ音声言語になってはいないが，「見て，ワンワンいるよ」と同じ意味であり，ことばの前段階である．

2)子どもの興味に大人が合わせる

この時期，子どもが視線を向けた対象について「○○いたね」など，大人がことばをかけることが，最も有効なことばかけの方法である．子どもが視線を向けているモノには，子どもの注意が向いている．注目しているモノについてその名称や属性について(「ワンワンだね」，「白いね」，「毛がフサフサしているね」)話してもらえば，目と耳から同時に刺激が入り，記憶の貯蔵庫にたまりやすい．子どもの興味に大人が合わせることは，年齢が進んでからも有効であり，特に発達障害のお子さんと対応する際には大切である．

3)乳幼児期から「目を合わせる」「視線を交わす」体験の重要性

視覚的共同注意成立のためには，二者間で「目を合わせる」体験が重要である．授乳時に乳児が大人の目をじっと見ることがあるが，そんな時に，大人の方もしっかり視線を返すことが非常に大切である．

授乳時のスマホ，携帯の使用，幼児期のテレ

ビやDVDの長時間視聴や，外遊びの体験の減少などは，乳幼児の共同注意の成立，ひいては言語・コミュニケーション発達を阻害する可能性があり，自制が必要である．

視線を向けた時に大人が必ず視線を返してくれるという体験は，子どもの中に安心感を育て，愛着，基本的信頼感など，生涯にわたる心理的な安定の基礎になる．目を向けること，注意を払うことは，乳幼児期に限らず良好なコミュニケーション関係を築くためのポイントでもある．

おわりに

ことばが遅れていたり，発達障害かもしれない子どもに対して，周りの大人は何をしたらいいのだろうか？

2歳の時，ドクターに「自閉症です．一生普通にはなりませんよ」と断言され，保護者が絶望の淵に沈んでいたお子さんがいた．その当時は確かに自閉スペクトラム症に特徴的な行動がそろっていた．ところが，年齢が進むにつれて過敏さが消え，周囲への興味が広がり，同時に知的な力の高さを発揮し，社交性も身につけた．細かく見れば少し風変りなところは持ち合わせながらも，現在は患者さんに慕われるドクターになっている．このようなお子さんは筆者の身の回りに決して少なくない．早期に開始した療育の成果や，子どもの風変りさを理解しつつ，適切に対応した保護者の努力も大きいのだろう．

筆者は診断の重要性を否定するものではないが，障害の有無を早期に正確に見極めようとするあまり，障害探しのまなざしになりがちな現状には違和感を覚える．それよりも適切な対応をしてくれる周囲の環境づくりが何より大切だと考えている．そのために，まず必要なことは，乳幼児期から成人期にかけて，種々の感覚過敏，多数派とは異なる外界の捉え方，聞こえ方，聞き取り方の違い，独特の興味の持ち方などについて，周囲の大人が理解し，そのうえで，子どもの様子をみながら適切に対応することである．

不安の中にいる保護者に，見通しの持てる分かりやすい説明を行い，今日明日，お家で保護者に何ができるのかを具体的に示す支援者でありたい．保護者に余裕が生まれれば，子どもにも安心が伝わり，外界へのアンテナが張りやすくなるからである．

障害があってもなくても，子どもに望ましい育て方は共通している．体が元気，心がすこやか，安定・安心が守られていることである．保護者に「『ことばのビル』を建てる暮らし」の大切さを説明することを通して，そのことを伝えたいと考えている．

最後に，アメリカの言語病理学者の残したことばを紹介する．子どもに限らず，人と人とのコミュニケーションの本質を語っていると思うからである．

「子どもの言うことをよーく聞くんです．いまその子が言っていることも，今まさに言わんとしていることも，まだぜんぜん言えていないことも．その子はあなたに言いたいことがある，その子にとっては意味のあることなんです，その子には大事なことなんです．ただのおしゃべり遊びだなどと思ってはいけません．

話し手としてのその子を尊重することです．なにもかもすっかり，よく聞いてあげて下さい．自分の言うことがきいてもらえていると感ずることは，成長しつつある人としてのその子にとっては，実にすばらしいことなんです．

子どもはその子なりに，ベストをつくしているんだ，と思うことです．

子どもにとっては，あなたに話をしたいということの方が，正しくしゃべれるかどうかよりもずっと重要なことなんだ，と思うことです」

（ウェンデル・ジョンソン）

文　献

JSI（日本感覚統合アセスメント Japanese Sensory Inventory Assessment）．JSI開発プロジェクト(代表　太田篤志)．http://jsi-assessment.info/，(参照2017-8-3)

加藤寿宏 監修，高畑脩平，田中佳子，大久保めぐみ 編著(2016)：乳幼児期の感覚統合遊び　保育士と作業療法士のコラボレーション．クリエイツかもがわ，京都

木村　順(2006)：育てにくい子にはわけがある．大月書店，東京

中川信子(1999)：1・2・3歳ことばの遅い子　ことばを育てる暮らしの中のヒント．ぶどう社，東京

日本感覚統合学会．http://www.si-japan.net/，(参照2017-8-3)

社団法人日本小児保健協会(2003)：DENVER Ⅱ―デンバー発達判定法―．日本小児医事出版社，東京

*　　*　　*

2019年1月8日
相馬郡医師会

子どもの心とことばの育ち
～周りのおとなにできること～

中川信子（言語聴覚士）
「子どもの発達支援を考えるSTの会」 代表
狛江市健康推進課 「ことばの相談」 相談員
狛江市特別支援教育巡回専門家チームスーパーバイザー

1

子どもの「発達」

「発達」ということは

日本語では到「達」すべきゴールに向かって進む
という意味合いが強いが・・・

発達（Development）
＝de（否定）＋velop（包む）

「包みが解かれ（開かれ）中にあるものが出てくる」
《なるべきものになる》

「はぐくむ」ということ　（＝羽＋くくむ）

障害を持ちながらも成長する存在
子どもは自分の中に成長する力を持っている

子どもの発達と環境

■子どもの発達は、
①子どもの持つ生まれつき（中にある）「力」　と
②周囲の環境　との　相互作用の中で進展する。

⬇

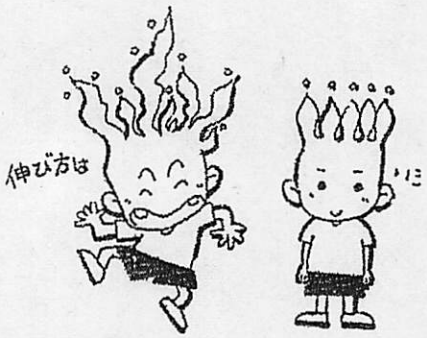
たとえ、育ちに「弱さ」があっても、よい環境があれば、伸びられる
⇒⇒日々の「生活」の中での環境改善を

⬆

保育の役割

いろいろでいいの
子どもは球根

伸び方はいろいろ



「療育とは注意深く(ていねいに)配慮された子育てである」
(高松鶴吉先生)

気かかりな子に必要なのは
「ふつうの子育て」
「ふつうの保育」
をていねいに行うこと

2

育てにくい子　気になる子
「発達支援」について

生まれたときから育てにくい・・・

- 生活リズムが整わない
  泣き止まない、眠りが浅い、ぐずり、夜泣き、
  明け方まで起きない、目覚めたあと機嫌が悪い
- 食べない、極度の偏食
- 身辺自立が身につかない
- 多動　どこへ行くか分からない　手を離せない
- かんしゃくが激しく、おさまらない
- ことばの理解がよくない→言い聞かせが通じない
- 「手のかかる」状態が長く持続する・・・
  →全く　もう　と言いたい

育てにくい子の 幼児期―集団生活―

別紙　保育園・幼稚園の気になる子

○お家で暮らしている分には「マイペース」でもOK。
　でも、「みんなと一緒に」が苦手、やりたくない、できない
○落ち着きがない
○話を聞けない
○すぐ手が出る　ひっかき　かみつき

○「対人面の問題」と言われる子も、その底には姿勢保持の困難、触覚、聴覚等感覚面の「ユニークさ」(困難)がある ことが多い。

育てにくい子の 学童期

姿勢が保てない
じっと座っていられない　落ち着いていられない
キレやすい
机の上がぐちゃぐちゃになる
読み書きが苦手　黒板を写せない

先生の言うことに注意を向けられない
友だち関係が作れない
友だちの邪魔をする
会話がかみ合わない
新しいことに取り組もうとしない
などなど・・・

育てにくい！　気になる子！
もしかして、発達障害？

◆成長と共に治まってゆく一時的なものも多い
聞き分けがないのが子どもらしい姿
大きくなってからは　楽しい思い出に　(^_^)☆

◆中には発達障害が関係していることもある

でも、望ましい育て方は共通よ

↓

楽しい関係、安心感のある暮らし

すべての子どもにあてはまる
育ちの視点　　発達支援

- 元気なからだを作り上げる
- 器用に動かせる手をつくる
- 見る力、聞く力、話す力を育てる
- 心が育ち、知力が向上する
- 人と気持ちを分かち合い、社会の一員になってゆく

「はじめて出会う育児の百科」(小学館)
汐見・榊原・中川

3
ことばについて
考えてみましょう

「ことば」三つのはたらき	「ことば」三つの意味
①思考の道具	①Speech 話しことば、音声言語
②伝達の手段	②Language 言語　思考　概念
③行動調整の役割	③Communication 伝えたい気持ち

「ことば」 三つのはたらき

1　思考の道具
「カギがないなぁ。ああ、昨日、カバンに入れたんだった。」

2　伝達の手段
「玄関のカギ、見なかった？」

3　行動調整の役割
「おいしそうなパン！　でも、まだお金を払ってないから、食べられない。」

行動調整とは？

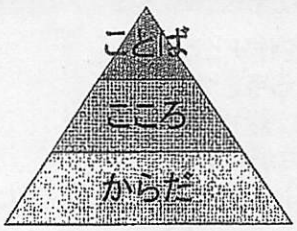
思ったら　前後を考えずにいきなり行動してしまうのは　行動調整ができないから(衝動性)

脳の働きには「興奮系」と「抑制系」

興奮のスイッチが入っても、「待て待て」と抑制できれば、行動はおさえられる。
＝　ことば(大脳皮質)の力

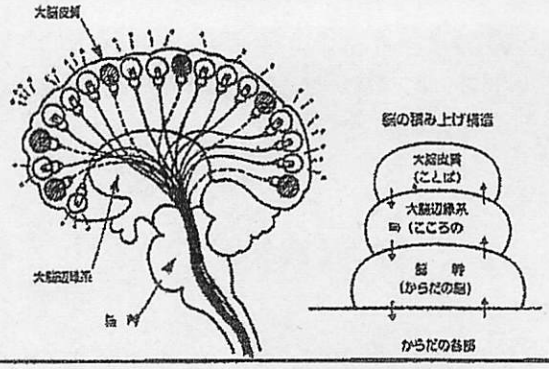
子どものからだ・こころ・ことば

見えるものは見えないものに支えられている



下から順につみあげる　ー　脳の構造と対応している

中枢神経系　脳の構造は「三つ重ねの鏡餅」中身は「電球」と「電線」……

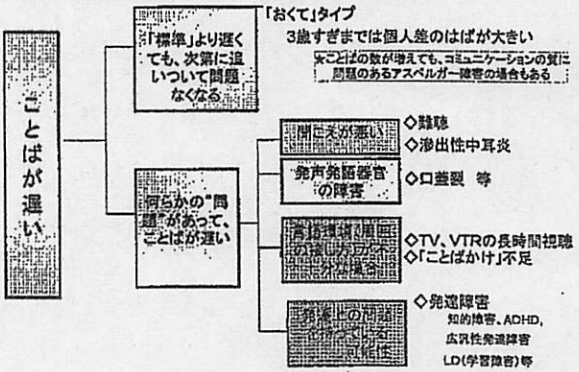


ことばの育ちは個人差が大きい

デンバー発達判定法　2003年　小児医事出版社

	通過月数の割合 25%	50%	75%	90%
意味なくパパ、ママなどと言う	6.0ヶ月	8.0	10.0	12.0
意味のあることばを1語	9.2ヶ月	12.0	14.8	17.6
ママ、パパ以外に3語	13.2ヶ月	15.6	18.0	20.4
二語文	19.7 ヶ月	22.7	2歳1月	2歳5月

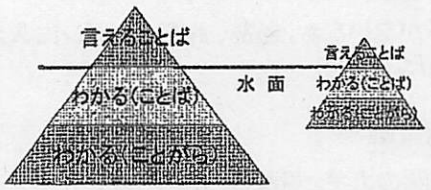
「ことばが遅い」　考えられる可能性



ことばが遅くても心配がいらないのは？

- お耳が聞こえている　（聴力）
- 大人の言うことがよくわかっている　（言語理解）
- むやみと注意が散りやすくない　（注意を向ける力）
- 指で指して教えてくれる
- 言いたいことを視線や表情で伝える（コミュニケーション）

ことばの氷山（わかるのが先：言えるのはあと）



ことばが遅い子には、実体験を通して「分かる」ことから「分かる」ことばをふやす関わりが必要

4

ことばのしくみを通して考える脳のはたらき

ことばが伸びるしょうすな子育て　脳科学と教育研究協会
1歳、2歳、3歳、ことばが伸びる子育て　ぱとす社

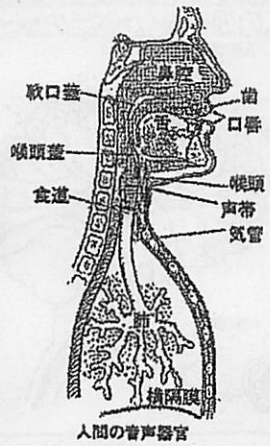
話しことばの仕組み

4.舌や唇を使って発音

3.鼻咽腔閉鎖をする

2.声帯の振動

1.呼吸（吐く息・吸う息）



人間の音声器官

26

音をつくる舌の動き（構音）

タ行の/t/

ダ行の/d/

サ行の/S/

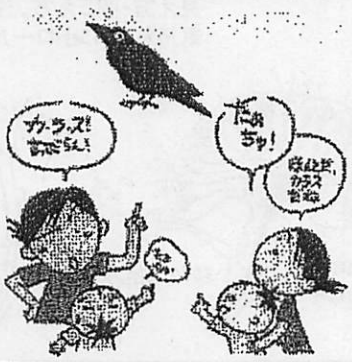
シ/ʃ/

27

発音（構音）について

- 日本語五十音が言えるようになるのはだいたい4歳半ころが目安。2歳3歳ではまだまだ・・・。
- 発音は早くからはっきりしている子も、遅くまでむにゃむにゃの子もいる(個人差)
- 聴力障害と口蓋裂については注意が必要
- 早く言えるのはマ行・パ行・バ行
- サ行・ザ行・ラ行は5歳半ー6歳までかかる子も。
- 訓練開始の目やす
  - 音が全体的にはっきりして、言えない音が特定されること
  - 本人が発音についての意識を持っている(誤り音の自覚)
  - ひらがなが読めるようになっていること
  - おおむね5歳を過ぎてから

言い直しはさせず、正しい音をさりげなく返してあげましょう



ことばのしくみと脳

大脳の場所別役割分担

言語の働きは大脳左半球にあります

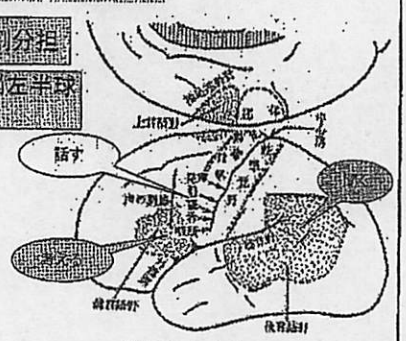
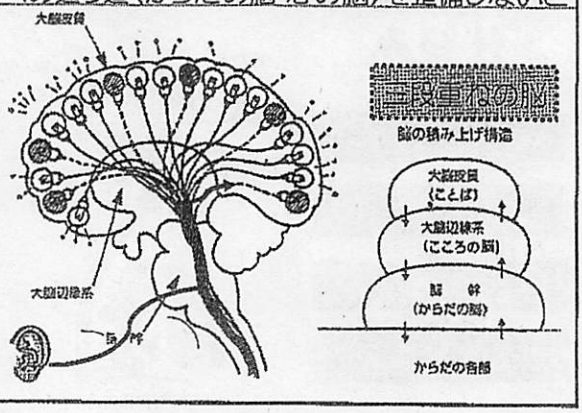
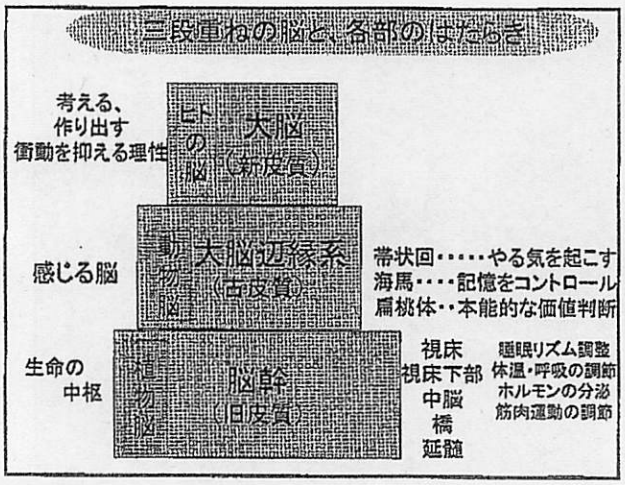


図 3-6　左の大脳半球にある役割は

音の入り口は耳ですが、実際は「脳」で聞いています
脳への通り道（からだの脳・心の脳）を整備しないと



三段重ねの脳と、各部のはたらき

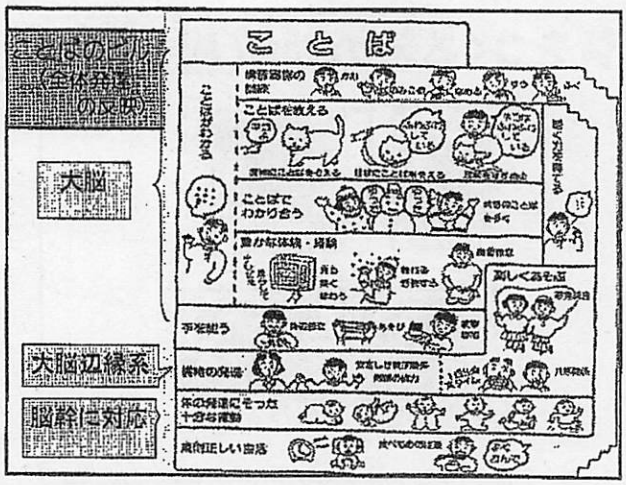


↓↓↓↓

脳への通り道（からだの脳・心の脳）
を整備しないと！

↓↓↓↓

身体を動かす遊び
安心できる環境
楽しさ、笑顔



5

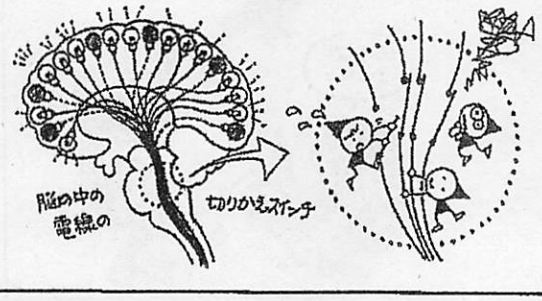
ことばの発達・子どもの発達を促す
望ましいかかわり
感覚統合を意識した遊び

「幼児期の感覚統合遊び」加藤俊一・クリエイツかもがわ
「育てにくい子にはわけがある」木村順・大月書店
「保育に活かしたい発達障がいのある子の感覚統合」
木村順・学研

「脳の途中の切り替えスイッチ」

不具合があるといろいろなことがうまく行かない

見え方・聞こえ方。注意の向け方
気持ちのコントロールなど・・・・



五感 ＋ とっても大事な「二感」

- 視覚
- 聴覚
- 味覚
- 嗅覚
- （触覚）
- 固有受容覚
- 前庭覚（平衡感覚）
- 触覚

気になる子への働きかけ・援助

- からだの面からの援助
  感覚統合的な要素の含まれる意識的な遊び
- こころの面からの援助
  よい点を見つけてほめる
  スモールステップに分けた的確な指示と指導
- 認知面からの援助
  分かりやすいことばかけ
  視覚的な手立てを多用する

感覚統合をすすめる（脳の中の電線の電気の通りをよくする）遊びの要素

- 揺れ　ブランコ　抱っこしてゆする
- 回転　抱っこで回転　芋ムシごろごろ
- 加速度　フロアカー遊び　すべり台
- 上下動　トランポリン　高い高い
- 触覚　抱きしめる、水遊び、粘土

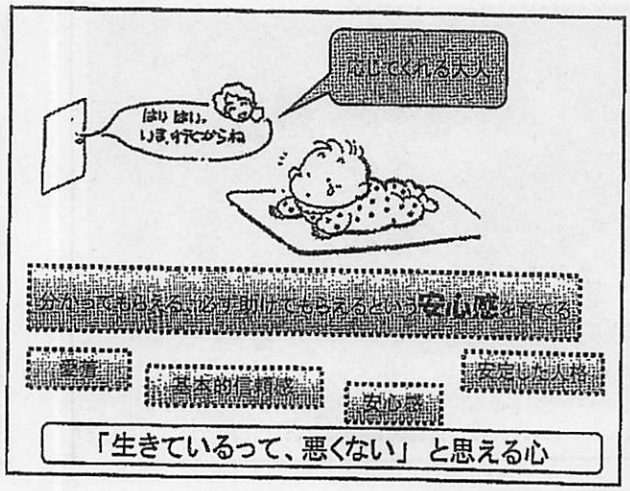
6　望ましいかかわり

子どもとのじょうずな話し方
ハウツーではなく心を育てるために

こころを育てるために必要なことは

- 「かかえること」と「ゆさぶること」
  受け止めて安心させること　と
  励ましてがんばらせること　と

小さいうちにしっかり「かかえて」おくほど、揺さぶりに耐えやすくなります
↑
（基本的信頼感）
「甘えさせる」（「甘やかす」とはちがいます



やがて

- 「困ったときにはお母さん（養育者）が必ず助けてくれる」と確信できると、
  お母さん（養育者）と離れていても泣かずに過ごせるようになる（3歳すぎてから）
- **「離れていても　心の中に母（愛着対象）がいる」状態**

安定した人格の大人

失敗しても再チャレンジできる強さ

ことばを伸ばす話しかけ方

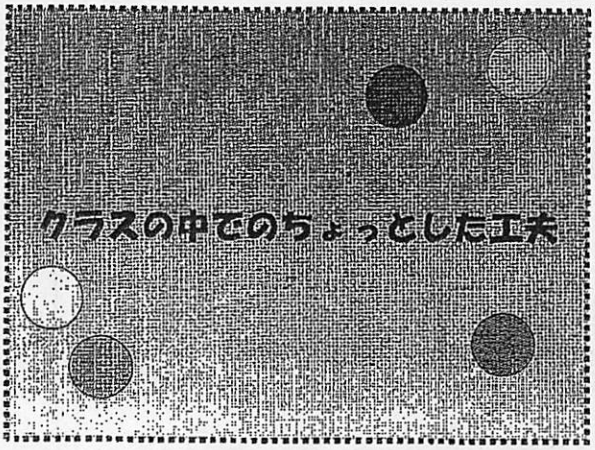
子どもの注意（attention）に大人が合わせる

共同注意と「ことばかけ」

ことばかけのヒント
子どもとの楽しい話し方

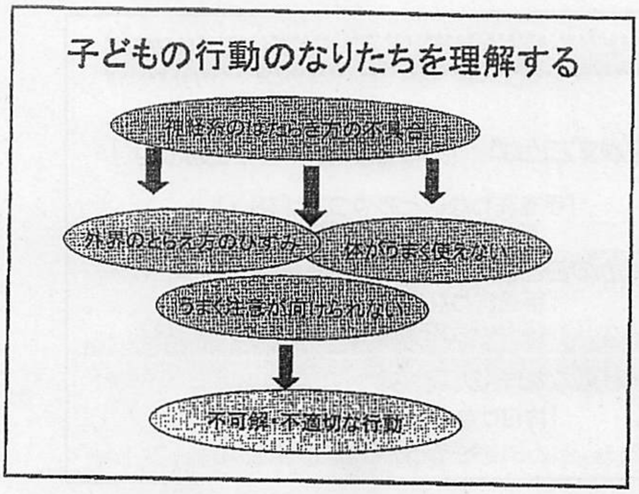
① 笑顔と、明るい声

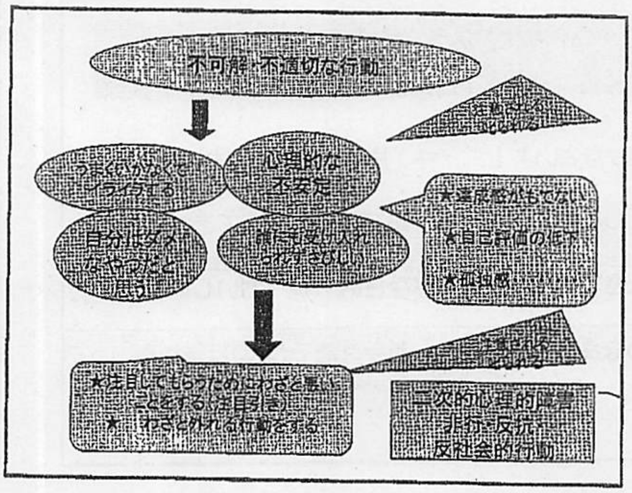
②子どもの名前は歌うように呼ぶ



「困った子」ではなく「困っている子」

- 困っている子　＝　支援が必要な子
- どの子もみんな何らかの支援が必要な子
- 「対処」「指導」よりも「理解」すること
  できないことを叱られるのではなく、できそうなことをさせてもらい、できたことをほめられる





目で見て分かりやすいように（視覚支援）

1　見やすい工夫　部屋の整理
　　　　　　図と地をはっきりさせる

2　ジェスチェー・指さし・豊かな表情

3　絵カード　写真カード

4　サインの導入
　　　　マカトンサインなど

結果的にすべての子どものために役立つ

耳で聞いて分かりやすいように

1　ゆっくり　はっきり　くりかえし

2　短い文で　大事なことばを強調する

3　注意喚起してから声をかける
　　一斉声かけのほかに「○○ちゃん」

4　大きな声より近づいて小さめの声で穏やかに
　　calm　close　soft

5　静かな環境　　聴覚的な図と地

結果的にすべての子どものために役立つ

ダメの代わりに願いを伝えましょう

- 「ダメダメ」の代わりに　こうしてほしいなあと思うことを言う（希望を語る）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

×「洋服、脱ぎ散らかしちゃダメでしょ！」
○「脱いだ洋服は、一か所にまとめます」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

×「ほらほら、走っちゃダメ！」
○「ゆっくり歩くよ」

「認める」かかわり＝よいところ探し

- ○○くん、お友達に貸してあげたんだね
- クツ、自分ではいたんだね
- しまってくれたんだね。ありがとう。

見てるよ
がんばってるの、知ってるよ！

- **よいところ探し**
- **大人の心の健康にも役に立ちます**

「ワワワことば」を使おう
ポジティブなことばかけ

片付けなさいよ！　⇒　片付けると気持ちいいよね

早くしなさい！　⇒　急ごう！　見ててあげるから

こぼさずにちゃんと食べなさい　⇒　おいしいね　(^_^)

やめなさい！　⇒　お手々離そう。お友達が痛いって

避けたいことば

脅かすことば　「～しないと　～できないよ」

「手を洗わないとおやつあげないよ」
⇒「手を洗ったら　おやつにするよ」

禁止のことば　「ダメ！」「いけません！」

「手を洗わなきゃ　ダメよ！」
⇒「手を洗おうね。おやつだから」

一方的な命令のことば

「片付けなさいよっ！」
⇒「そろそろ片付けようよ」

7
発達障害（発達マイノリティ）
脳のはたらき方のクセ

人は　同じものを見ていても

同じようには見えないし

同じように感じるとは限らないのです。

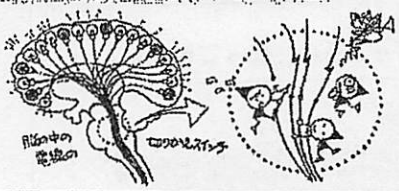
人は　みな　ちがいます

脳の働き方の「クセ」は根性や努力では治せない

電球のつぶが小さい　　電球が暗め

電線がつまっている

切り替えスイッチがうまく作動しない・・・・・



「脳の働き方のクセ」を改善するには？

全体発達をうながすこと　！！

生活リズムを整える
からだを使ってたくさん遊ぶ！！
安心できる楽しい生活をすること

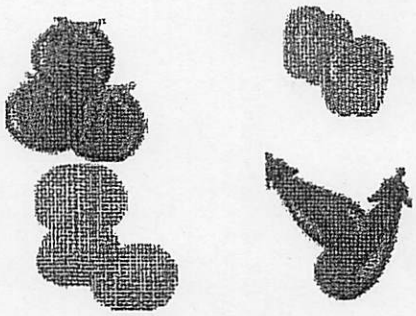
「育てにくさ＝発達障害」と考える必要はありません。
でも、発達障害の可能性も視野に入れた「望ましい接し方」をすることは、どの子にとっても有効です。

脳の働き方のクセ！
（遺伝子情報で決まっている）

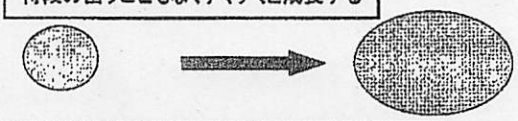
生まれつきだから変えられない
でも、変えられる部分もあります

よい接し方（＝よい環境）

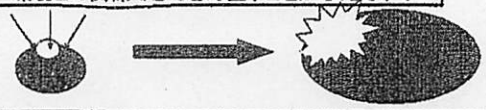
根本的に変えようとしてもムリ



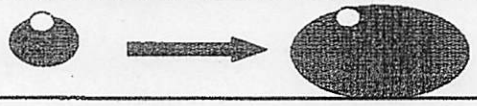
特段の困りごともなくすくすくと成長する



もともとの「特性」に発達の歪みや遅滞があると、
環境との関係でどんどん困りごとがふえてゆく



めざすべき子ども像（成長したときの姿）は
障害（不具合）はありつつも　すくすくと成長する　こと



**障害があってもなくても　子どもに
望ましい育て方は共通です**

★体が元気
★こころがすこやか

ふつうの暮らしをていねいに
「ことばのビルを建てる暮らし」

●からだを使った遊びをしっかりと
●生活リズムの確立（早寝早起き）

●安心感、基本的信頼感を育てる

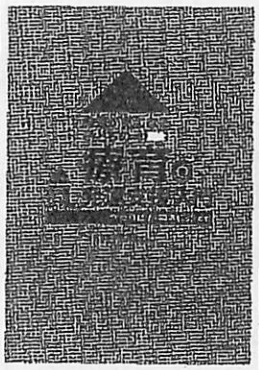
子どもには
手をかけよ
目を離すな

幼稚園・保育園の「ちょっと気になる子」ってどんな子？

じっとしていられない すぐに席を立つ 着席しても、もじもじ手足を動かしたり、ぐにゃっと姿勢が悪い からだの使い方がぎごちない （突進してきてぶつかる・スムーズに止まれない） きちんとしているべき時に走り回ったりよじ登ったりする すぐに寝そべってしまう まっすぐ立っていられない	からだの面での「問題」
不器用・ものの扱いが乱暴 いくら教えてもできるようにならない（ボタン・スプーン） 両手をいっしょに使うことがむずかしい なぐり書きから進歩しない	手先の使い方
先生の話を聞いていない（⇒自分勝手なやり方） じっとしていられない、余計なことに気が散る 一つのことに集中できず、あれもこれもやりっぱなし ぼーっとしている※	注意の向け方
すぐにものを投げたり友達をたたいたり噛みついたりする 注意すると怒る・泣きわめく 急に大きな声を出す 友達のやっていることにちょっかいを出す	衝動性・攻撃性
目が合わない・あいにくい 友達のそばにいてもひとりで遊んでいる・孤立した感じ いっしょに遊ぼうとするといやがる 友達がやっていることを邪魔する・からかう・ちょっかいを出す	対人関係 コミュニケーション
表情にとぼしい。笑顔が少ない 先生にペターっとくっついてくるような行動が少ない	感情の育ち
初めてのことや人にはとても臆病（食わず嫌い） 人による評価を気にする（励ましたりほめてもらわないとできない） うまくできないとひどく落ち込む・やつあたりする 自信がない・できても心から喜べない 悪いことば・相手を傷つけるようなことを（わざと）言う※	心理面

いつも同じことばかりやっている ちょっとでも違うことをやろうとすると大騒ぎする 偏食 他の子が自分の思い通りのことをしないと気がすまない 洋服の着替えをしたがらない・苦手※ テレビのせりふのようなことをいつもしゃべっている	こだわり・興味のせまさ
手をつなごうとするといやがる 洋服の着替えをしたがらない・苦手※ すぐ洋服をぬいでしまう おとなにべたべたくっついてくる・ベターッともたれかかる のり・ﾌｨﾝｶﾞｰﾍﾟｲﾝﾃｨﾝｸﾞ・砂遊びなど苦手、またはそればかりやる	触覚的なこと
ことばの発達が遅い 文章としてまとまらない 話し方に抑揚がなく感情の伝わりにくい話し方をする 自分が興味のあることについて一方的にしゃべる 相手の言うことをよく聞いていない 共感する動作（うなずく・微笑む）などが少ない 質問に答えられない 場面に合わないことをだしぬけに言う 悪いことば、相手を傷つけるようなことばを（わざと）言う※	ことば コミュニケーション
（ぼーっとしている）動きや反応が遅い・ 他の子ができていることができない・理解がよくない お話の筋や、先生の説明の内容がわかっていない	発達（知的能力）の問題
よだれが多い 発音がはっきりしない・言えない音がある 噛まずに丸呑みする・噛む必要のある食べ物は食べたがらない 舌小帯短縮といわれたことがある 口を開けている・鼻がつまっている	口の動き・発音など
大きな音ではないのに耳ふさぎをする 横目、また目を細めて（まぶしいような目つきで）ものを見る 縞模様・水の吸い込み口などが異様に好き 転んだりケガをしても痛がらず平気	その他（視覚・聴覚など）

対処法を考える前に、「どう理解したらいいか」、その手がかりをさぐってみましょう。



保育・療育・教育
現場の方へ

「発達が気になる子どもの
療育・発達支援入門
目の前の子どもから学べる専門家を目指して」

市川奈緒子・岡本仁美 編著
金子書房 2018年8月

ことばの育ち

小冊子
ことばが伸びる
じょうずな子育て

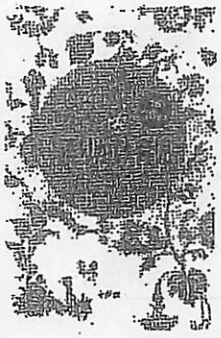
中川信子

一般社団法人
日本家族計画協会

ことばの育ち

1, 2, 3歳
ことばの遅い子
～ことばを育てる
暮らしのヒント～

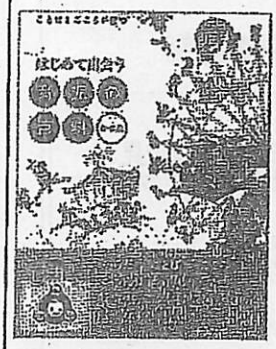
中川信子 ぶどう社



ことばの育ち

「わが子の発達に合わせた
1日30分
語りかけ育児」

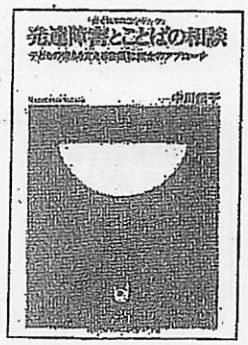
サリーウォード著
小学館 2001年



子どもの育ち

はじめて出会う育児の百科
汐見稔幸
榊原洋一
中川信子

小学館
2002年6月



発達障害とことばの相談

中川信子

小学館
2009年8月

保護者支援

Q&Aで考える保護者支援

発達障害の子どもの育ちを
応援したいすべての人に

中川信子

学苑社　2018年4月

保護者支援

発達障害の子を育てる
親の気持ちと向き合う

中川信子編著

金子書房
2017年1月

感覚統合

育てにくい子には
わけがある
～感覚統合が
教えてくれたもの～

木村順
大月書店

感覚統合

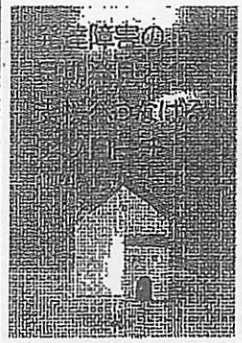
「乳幼児期の
感覚統合遊び」

高畑隆平ほか
クリエイツかもがわ

感覚統合

保育者が知っておきたい
発達が気になる子の
感覚統合

木村順
学研

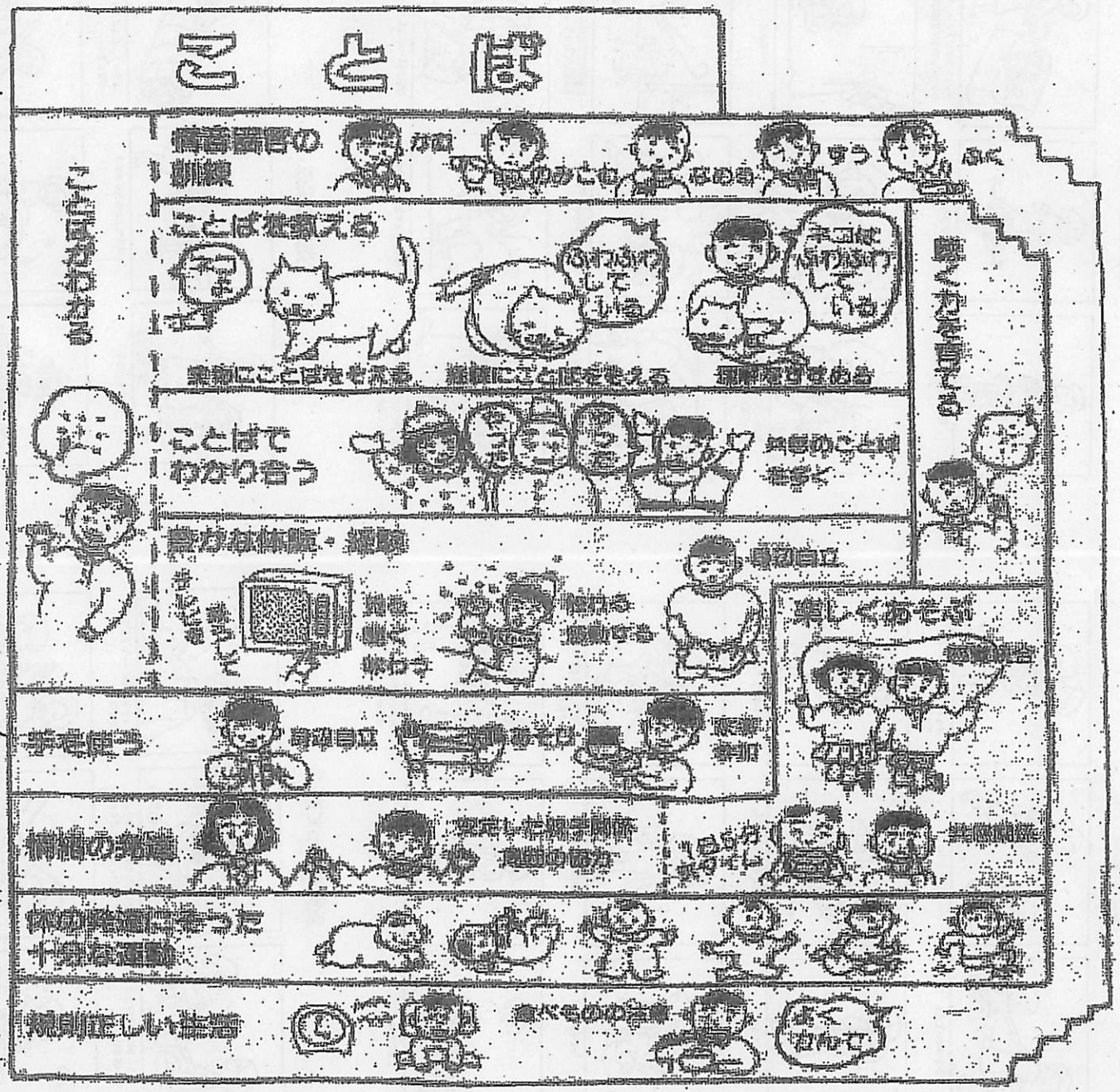


発達障害

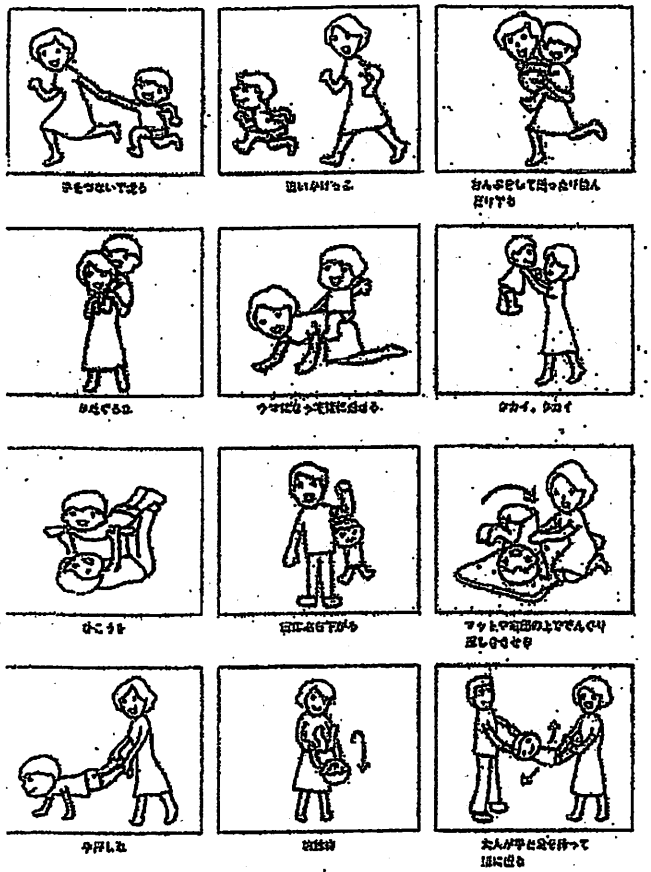
発達障害の早期発見と
支援へつなげるアプローチ

市川宏伸　編著
金剛出版

ことばのビル

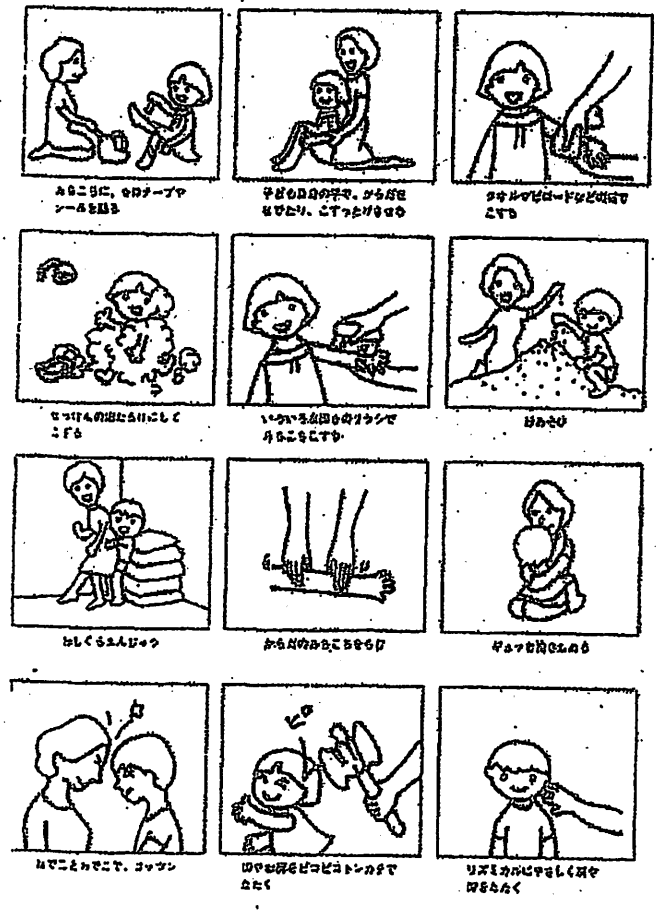
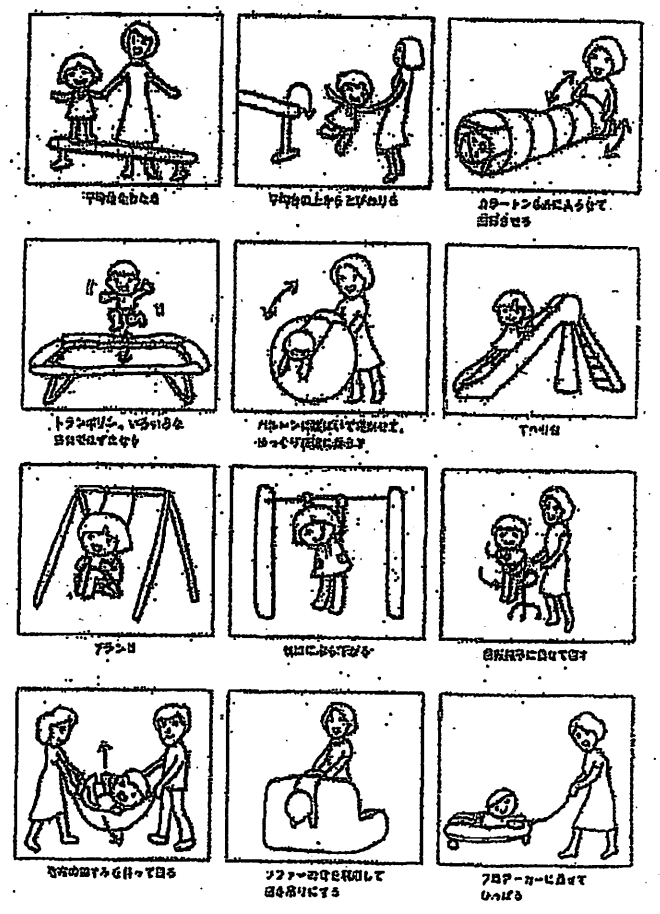


親子で遊ぶ－1



親子で遊ぶ－2

触覚を使って遊ぶ



遊具で遊ぶ